

森の機能美を考える

岩手大学農学部 関野 登

森には様々な機能があり、そして美しさがある。とりわけ針葉樹と落葉広葉樹の混交林が織りなす紅葉の美しさは格別である。19 世紀の終盤、ドイツ人のザーリッシュは「人工林の美学」を著し、森の景観を美学に昇華させる林道設計にまで踏み込んだ。100 年以上経った現在でも“森林美学”という伝統科目は日本国内の一部の森林系教育で実践されているが、現在の森林美学を一言で表せば、森林の持つ多機能の高度化と統合化と言えそうである。

“美”とは、「知覚・感覚・情感を刺激して内的快感を引き起こすもの（哲学用語）」と広辞苑には書かれている。さらにブリタニカ百科事典には、“美”には直接感覚を通さない、いわゆる“精神美”があり、それは“超越美”と呼ばれる、とある。森がもつ様々な機能とその美しさのうち、紅葉の美しさは感覚による“美”そのものであるが、はたして“超越美”に当たるものは存在するであろうか？ 例えば、“森は海の恋人”というキャッチフレーズがあるが、これは森林の水源涵養機能が養殖漁業にとって極めて重要なことを示唆しており、その機能と人との協働は、私たちが普段、直接的に感じ得ない精神的な美しさ、“超越美”と言えないであろうか？

同様に、庭木の生長を見て、“随分と大気中の CO₂ を蓄積したものだなあ”と感じる人は少ないと思うし（多くの人に感じほしいが）、木造住宅を建てた人が我が家に何トンの CO₂ が貯蔵されているかを考えることはまずない。“森林の炭素吸収”と“木材利用による都市の炭素ストック”が組み合わせられた“森と人との協働による炭素循環”は、直接感覚を通した“美”ではないものの、機能美に溢れる“超越美”と言えるのでないか、と筆者は感じている。本日の話題提供では、“森と人との協働で行われる炭素循環”について、次のような視点から言及してみたい。

- ① 大気中の CO₂ 濃度の現在と今後（パリ協定）
- ② 日本の森林の炭素蓄積（森林生態系の炭素循環）
- ③ 林齢と炭素固定能力
- ④ 木材利用による林齢の平準化（需要開発の必要性）
- ⑤ 日本のエネルギー需給における木質バイオマスエネルギーの位置づけ